Shinran 850th 800th

京都教区

2022年4月1日発行

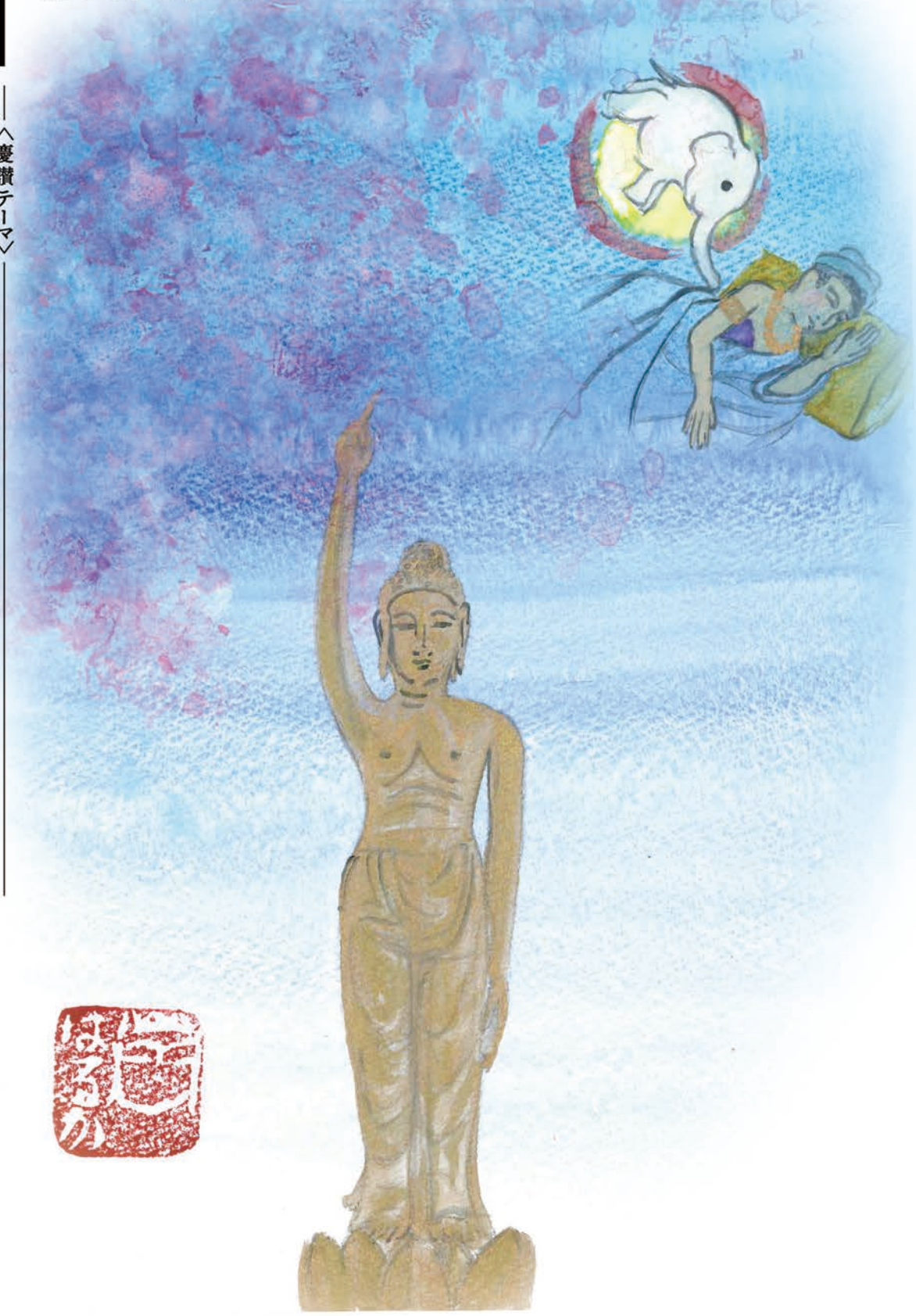
慶讃だより

2022年 春号

〈慶讃テーマ〉

南無阿弥陀仏

人と生まれたことの意味をたずねていこう



- 慶讃テーマから問われてくること
- 慶讃テーマ委員
- 8地区より
- 各地区のお待ち受け始まる

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要（きょうさんほうよう）

第1期法要/2023年3月25日(土)～4月8日(土)　讃仰期間/2023年4月9日(日)～4月14日(金)　第2期法要/2023年4月15日(土)～4月29日(土)

南無阿弥陀仏
人と生まれたことの意味をたずねていこう

慶讃法要テーマに関する教学委員会委員
慶讃テーマ委員
金松 俊一（かなまつ・しゅんいち）
京都教区 西方寺

私事で恐縮ですが、四十数年前、ある縁で資格を得るために大谷専修学院に学びました。当時信國淳先生が学院長をされ、一年間の学習で教えの言葉にふれてきましたが、卒業レポート面接後、先生から「君は、君自身たすけられなければならない者だとは思ってもみないでしょう」と。それなりにやってきたという思いの中で頭の中は真白になり、そのひと言だけが残りました。それまで自分が生きてきた延長線上を、ただとりつくろってきたに過ぎないことを思い知らされました。

それ以後これまで学習してきた言葉をたどりかえすなかで、親鸞聖人の「自力（じりき）というは、わがみをたのみ、わがこころをたのむ、わがちからをはげみ、わがさまざまの善根（ぜんこん）をたのむひとなり（聖典五四一頁）」という言葉が甦ってきたのを覚えています。この言葉は、私のこれまでの生きてきた、自身でさえ気づかない貪欲な力、もっといえば生きる動機そのものであるといってもいいと思います。身といい、心といい、力といい、善根といい、およそたのみにならないものをたのみとしていることを教えられます。聖人が仏陀の説かれた法によって気づかされた言葉であることは言うまでもないことです。七六〇年以上も前の言葉です。

考えてみると、私たちが生きるということをつづめていけば、それは声をかけ合って生きているといっていいと思います。言葉は人と人との関係の豊かさと場を開く一方で、その豊かさを奪っていくことさえあります。日々の生活の中で言葉が足りなかったり、届かなかったりして、お互いの心はあらぬ方向に見失われていきます。そうであればこそ、あやまちの多い、危うい者として自身が見出されなければならないのでしょう。さらには、今日の状況をふりかえって、言葉は私の中で立ち枯れ、虚飾に満ちあふれ、ただ泡だっていくばかりのように感じられます。

善導大師が南無阿弥陀仏について、限られた人びとの行としての念仏を否定し、真実の行は阿弥陀仏の行、法のはたらきであるといただかれました。それは仏教における歴史的転換となりました。これは教理ではなく、この私の仏についての考えが正しいかどうかではなく、仏がこの私をどう見出しておられるのかという、その仏の正意を明らかにされたのです。

そして五百年余の時空を超えて、称名の念仏は不回向の行として法然上人、親鸞聖人に届いたのです。人の力をたのみとし、さまざまな善根をたのみとする宗教からの解放を意味することだったのでしょう。

私たちは現にこうして共に生きていながら、さまざまな意味づけや価値づけをして、容易に越えることができない壁を生み出し続けています。わが身、わが力、わが心を中心に考える世界が、私たちお互いを見失っていくことに深くかかわっていることに気づかないわけではないのです。私こそが主体であるという思い込みから自由になる、それこそが南無阿弥陀仏の名で表される世界です。いま、教えとなり、言葉にまでなっている仏陀の目覚められた法の前に、聞名の歩みをつづけたいと思います。

Shinran 850th

南無阿弥陀仏を灯火として

雲因

小谷 尚美 こたに・なおみ
因伯組 淨福寺

もう十年も前のことですが、『歎異抄』の「火宅無常」に聞くことを主題とした、教区坊守研修会がありました。火宅無常の世界とは、衆生が今にも倒れそうな家の中で、欲望の火に焼かれていて、外から見ると大火事なのですが、外から如来がその真実を伝えても、衆生は欲を貪ることに没頭していて、気付かない。真実を聞いても、真実と受け止める力がなく、「私は大丈夫」となる様子とお聞きしました。そして、その火宅無常というのはもともと「法華経」の譬喩品にあるのだと、「法華経」の説かれ方に話が及びました。その「法華経」、三止三請（さんしさんしょう）のやり取りがあったうえで、ようやく説かれたのですが、その説法が始まる前に五千人もの弟子が立ち去ったそうです。私が驚いたのは、それに続く先生のお言葉でした。自分はその五千人に入るかどうかを考えた時、自分は残る方だと考えるか、また、残って説法を聞いたとして、きちんと受け止める力があると考えるか。そこが問われているのが「法華経」ではないかと。そこに親鸞聖人が、「法華経」と決別された理由があり、親鸞聖人は阿難と一緒に「大経」に聞いていかれることを決められたのではないかと。私の驚きというのは、「法華経」の説かれ方をお聞きしている時、私は無意識に、自分はその説法の場所に残る者として聞いていたからこそのものです。この私は自分を、話の聞ける者、少しは分かる者としていることが知らされ、お恥ずかしいことでした。しかしこのことは、大きな気付きでもありました。自分はどこに立っているのかを、よくよく問わねばならないと。また一方で、ある意味、分からない者でいてもいいという安心も湧きました。

昨年六月、実家の母が還浄しました。コロナ禍においての葬儀。大きなものは出来ない代わりに、喪主の兄の提案により、母が可愛がっていた九人の孫からのメッセージを式次第に入れました。当日、孫たちは、それぞれが母と育んだ時間を手繰（たぐ）り、湧き出る思いを自分の言葉にのせました。山は見る角度が違えば姿も異なるように、そこには、九通りの母の姿がありました。通夜や葬儀後の、ごく少人数でのお斎では、それぞれが亡き母と紡いだ歴史を振り返り、みんなで語らいました。その中で気付かされたのは、私が母の立場だったら、逃げ出したくなるであろうと思うほど、時代的にも、立場的にも苦労が多かったはずの母が、思うように動けない体になってからも、自分の人生を有難いと喜びを口にしていたことです。仏法に出遇えたからこそ、苦をこの身に引き受けられたのでしょうか。

この度の母のことで、久しぶりに一回り以上も大きい従兄に会いました。幼少期からとてもお世話になっていて、いつ頃からなのか、気付いた頃には、静かな口調で「尚さん、お念仏称えとるかね？お念仏称えなあかんよ」と言われるのが挨拶代わりでした。その言葉は、結婚して会わなくなってから、より一層心に響いています。

火宅無常の教えや親鸞聖人が「大経」をいただかれたお心、母との出遇いなおし、従兄の念仏の促しは皆、南無阿弥陀仏を灯火にせよとのおはたらきかもしれません。そのおはたらきを地図に、南無阿弥陀仏を灯火にして、人と生まれたことの意味をたずねて参りたいと思います。

各地区のお待ち受け始まる

２０２３年４月のご本山での宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要をお迎えするにあたり、京都教区では地区または組でお待ち受け大会を開催します。現在の進捗状況や方針のおしらせです。

湖南地区

これまで、地区行事に参加できなかった人を中心に組織委員会を結成し大会運営の指針を座談形式で話し合い中。

湖西地区　各組で独自に開催

近江第２５東組　検討中

近江第２５西組	２０２２年5月１４日（土）	傳正寺(高島市)	講師：織田顕祐氏
近江第２６組	２０２２年6月１１日（土）	ガリバーホール	講師：四衢　亮氏

若狭地区

２０２２年4月１０日（日）　JA福井上中支所大ホール　講師：一楽　真氏

石見地区　各組で独自に開催

石東・石西組　検討中

今後随時、上記以外の地区の開催情報や実施されたお待ち受け大会の様子を誌面にておしらせしてまいります。

2022年冬号の答えと感想の紹介

たくさんのご応募ありがとうございました。
慶讃クロスワードパズルの答えとご応募いただいた方の中から2名の方の感想を掲載させていただきます。

A	B	C	D
せ	ん	こ	う

◆宗教離れと長く問題になっていますが、その反面、悩みを抱える人は多くいます。そういった方々の拠り所が宗教だと思っているのですが、昨今は自己啓発本やYouTube・インスタなどの登録者数（フォロワー数）が多い方を拠り所とする人が多いように思います。そのような中で、阿弥陀さんを拠り所とされた委員さんは、若い世代の心に寄り添う「術」を探していく上で、キーマンとなる方だと思いました。

◆ボヤーっとむかえようとしている慶讃法要だけど、待っていて下さるご門徒さんがいるんだなぁ……と思いました……

真宗大谷派 京都教区『慶讃だより』2022年春号
第5号 全8号
発行人　日野 隆文（真宗大谷派京都教務所長）
発行日　２０２２（令和４）年４月１日
発行所　真宗大谷派京都教務所　Tel：075(351)5260
〒600-8164　京都市下京区花屋町通烏丸西入
Eメール　kyoto@higashihonganji.or.jp
表紙絵「願生～願われているいのちに～」伊藤はるか

真宗大谷派京都教区ホームページ

京都教務所　検索

編集後記

今冬は私にとって記憶に残る長く寒い冬でした。滋賀県彦根。昨年末の大雪で全国ニュースになり被害も大きかった冬でしたが、いつの間にか春の訪れも感じられるようになりました。それと時を同じくして、慶讃法要の声が近くで聞こえるようになってきました。コロナ下ですべて止まっていたように感じた時間も「今」を生きることを強く意識づける機縁となり、聖人の歩みに触れるその芽を吹くための冬の様な準備の時間だったのでしょうか。これまで関心の薄かった私にも届く各地区での慶讃お待ち受け大会。まずは若狭地区で始まります。『慶讃だより』でもお届けしてまいります。

（教化広報部会　蒲池 義圭）